



圖解

量地指南後編

四

41
5275
7



5275
7

戸川藏書

量地指

南後篇卷之四

算勘術

勢南 處士 村井昌弘編述

算勘之辨

算數家の地理と量ること。序例も述ぶるが、嚴密巨細ある
とて、尤宜しくとらふべし。去るも迂遠ありて急速の要用甚なるべし。
器物繁多ありて勞煩なるは是に因りて輿地家の取らる處勿論
なりといへども、數ハ萬物の根元。又吾量地の不捨術をば、今
其大畧を述べて左ふ記す。

器械之制

算術家の可見其術少きがゆへに器械の品も又多かり、其
理ハ量地家の器物に拘りていへども、其甚ハ大ふ異なり故に量

量也 昔 南 後 篇 卷 之 四

早稲田 大學 圖書館
昭和 27.6.4 文
藏 書

地者流といへども其制作と辨知せんばあるべし。茲とて其大畧と左小摸して参考ふ便し。

地板の制長サ三尺五寸。厚サ一寸。幅一尺二寸以上。制る。板乃両端の手前は釘穴と一ツ宛明せあり。是ハ釘とさし。水繩を

引く。板の長サ四尺。厚サ五分。幅一尺。四方とも小矩よ合せて直よ劑つて用るなり。

間竿の制長サ六尺。押して制る。一尺づの所ふ墨を以て印とす。方一寸三分と節と。

表木の制ハ木にてし竹をくも正直にして少し斜曲るも用ひ長九尺。二本。五尺。二本。木を造らむ。太サ方一寸二分

計。竹なす。三寸四五分。廻り。浅吉と。

水繩の制ハ芋系を三つ斜よ合せて制する。又ハ大鷹の繳と用ゆべし。長さハ二十間許り。又一尺五寸づの繩四筋は

槌定規の制木ハ朴木とてす。軽き。長さ六尺一本。長二尺五寸一本。大小二本の深サ一寸三分。幅一分計ふ

二本ある。尺寸は盛付る。勿論なり。

短矩 三寸。加路土とも云。の制真鍮。又ハ鯨鬚と以て制る。曲尺の三寸五分と十間と。是にけり。界引の線を量る。渾癸の理に

違ちがふここくくなり
右みぎ器き械けい大だい畧りやく量りやう地ち家かのの器き物ぶつにに準じゆんじじてて知しるる煩わづらひししるる
其その圖ずをを省しやうくく猶なほ此こゝ外を渾こん癸まい磁じ石せき小せう道どう具ぐ等とうああままとと通つう例れい
なるなるハハ記しささげ

町見術名

- 平町見と云ハ 平陸と量る方也遠近同術也
- 上町見と云ハ 山岳と量る方也高低同術也
- 下町見と云ハ 豁谷と量る方也淺深同術也
- 向町見と云ハ 彼面と量る方也廣狹同術也
- 右四件と四町見と云 高低と知る方也
- 高と知ると云ハ 高低と知る方也
- 繪圖町見と云ハ 城圖を作る方也

乱面町見と云ハ

混雜の品と量る方也

物陰町見と云ハ

物と隔て量る方也

地形高下と云ハ

地形の高低と知る方也

四町見辨

算數家の町見術しうすうかふふ平町見へい上町見かみ下町見した向町見むかひといふいははありあり是こゝをを算家しうすうかふふててハハ町見ちやうけんのの父ちち母ははととはは尤なほ故ゆゑああるる量地家りやうちかとといいははしし其その揆かへり一いつありあり然しかどもども算家しうすうかのの術じゆつハハ迂遠いゆゑんににてて急速きうそくふふ用もち成なり為なりささびび量地家りやうちかのの術じゆつハハ徑捷けいせつななりりてて即席しやくせきのの要ようとと相成あひなりとと其その得失とくしつ同日どうじつのの談だん小せう非ひをを其その外そと町見ちやうけんのの名なああるる名目なめい多おほししややいいええとと時とき小臨せうりんてて術名じゆつなととかかととののななままとと一定いぢやうのの法ほうありあり故ゆゑ小四町見せうしやうけんのの外そとああままにに成なり記しささずず都みやこてて量地家りやうちかふふおおのの數者すうしやのの術じゆつをを用もちひひとといいははししもも定さだままりりとといいははしし今いま初學者しよがくしや勤考きんかうのの為ためにに

結く。唯四町見の法を茲に記す

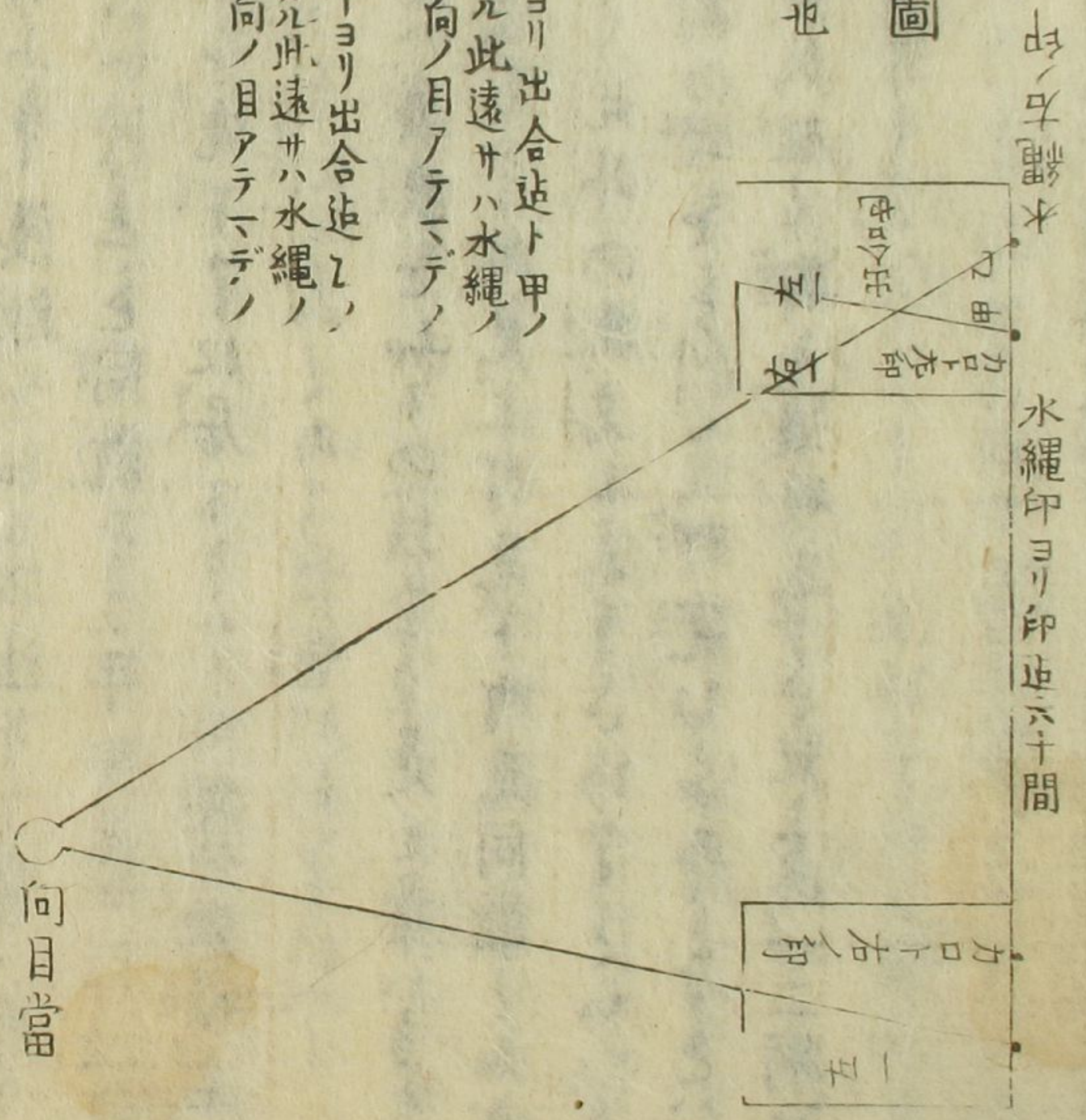
平町見といふは、遠近を志すの法なり。業といふは、
とと其術作法を皆同じ。まづ地板を居て、随分直と
極多々々、地板乃、両端の穴より針をさし、此針は水繩
とまれば、はけて、地板より五分上げ、水繩を張る
左方より釘二寸計を隔て、水繩に印を付け、此印より
右の方ハ三尺隔て、又印を付るなり。水繩ハ六尺より一丈
よりもりて、若くは、つゝ、し、も、み、ま、り、た、手廻りあり。
上り町見といふは、高低を知るの法なり。業ハ品々、つり
ても、其術作法ハ、いづれも、同断なり。平町見の作法ハ、
同じ。但、高サ一尺むらりに、臺と、つゝ、其、上、に、地板を
置、ち、り、と

下り町見といふは、浅深を知るの法なり。業ハ色々、に
て、其術作法ハ、いづれも、同断なり。平町見の作法のご
と、つゝ、て、地板を先下り、に居るなり。水繩の張様、右同
断なり。板下り、を、つゝ、つゝ、あ、つゝ、は、留、れ、釘、を、さ、し、べ、
向町見といふハ、廣狭を知るの法なり。是も業ハ多々、れ
ども、其術作法ハ、平町見、上町見、下町見、同断と知るに
右に述る、つゝ、此外の術名を、あ、ま、り、こ、つゝ、ま、と、い、へ、と、
何をも、此四術の理を、つゝ、つゝ、押、究、む、ふ、あ、と、な、ま、ハ、辨
じ、り、に、つゝ、つゝ、但、一、聊、り、通、曉、と、つゝ、つゝ、此、の、一、二、術、と、後
小、掲、ぐ、見、る、を、つゝ、

平町見之圖

遠近術也

短矩左ノ印ヨリ出合迄ト甲ノ
通り等ノ計ハ此遠サハ水繩ノ
左ノ印ヨリ向ノ目アテマデノ
遠サナリ
短矩右ノ印ヨリ出合迄ト乙ノ
通り等ノ分ル此遠サハ水繩ノ
右ノ印ヨリ向ノ目アテマデノ
遠サナリ

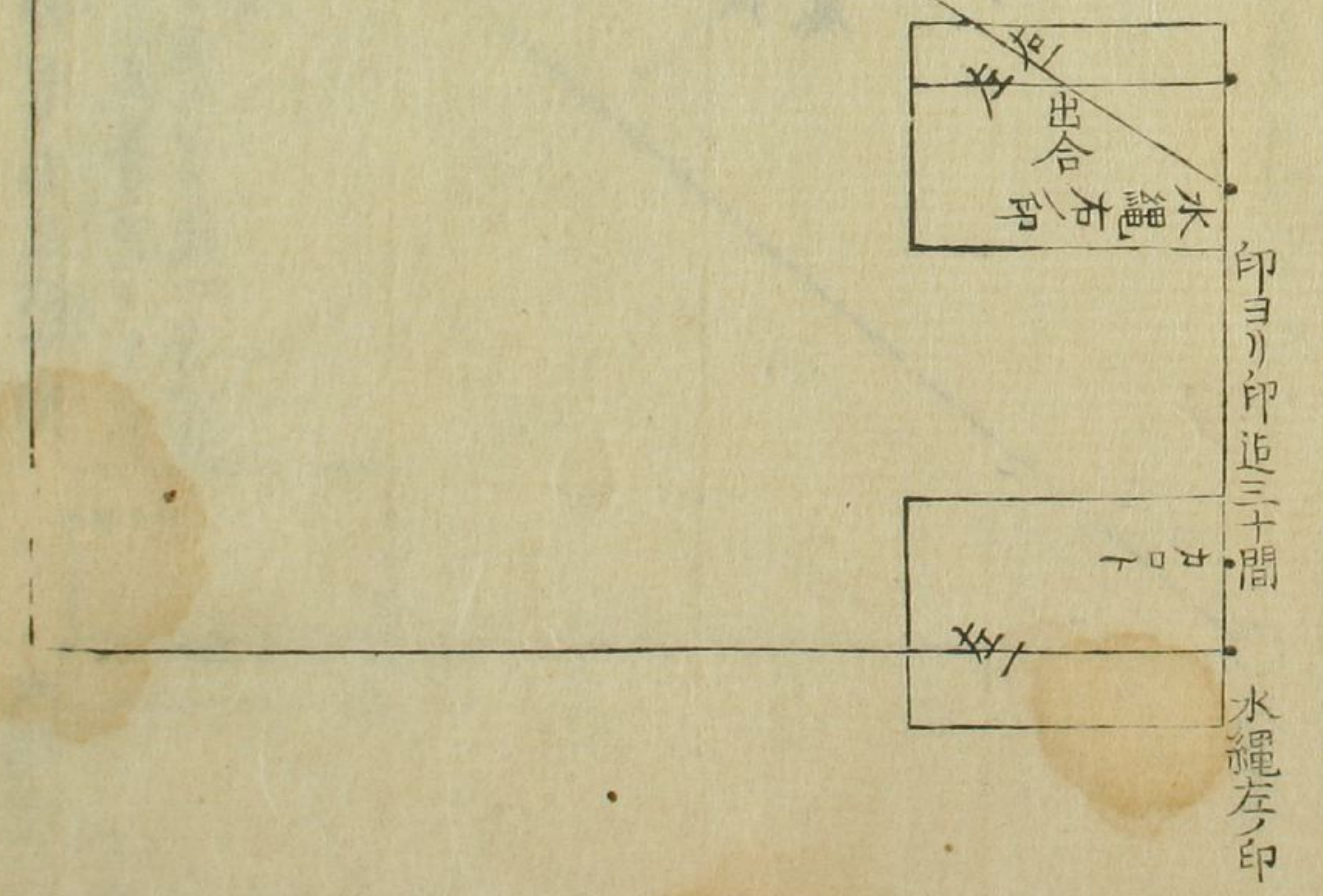


町見之圖

高低術也

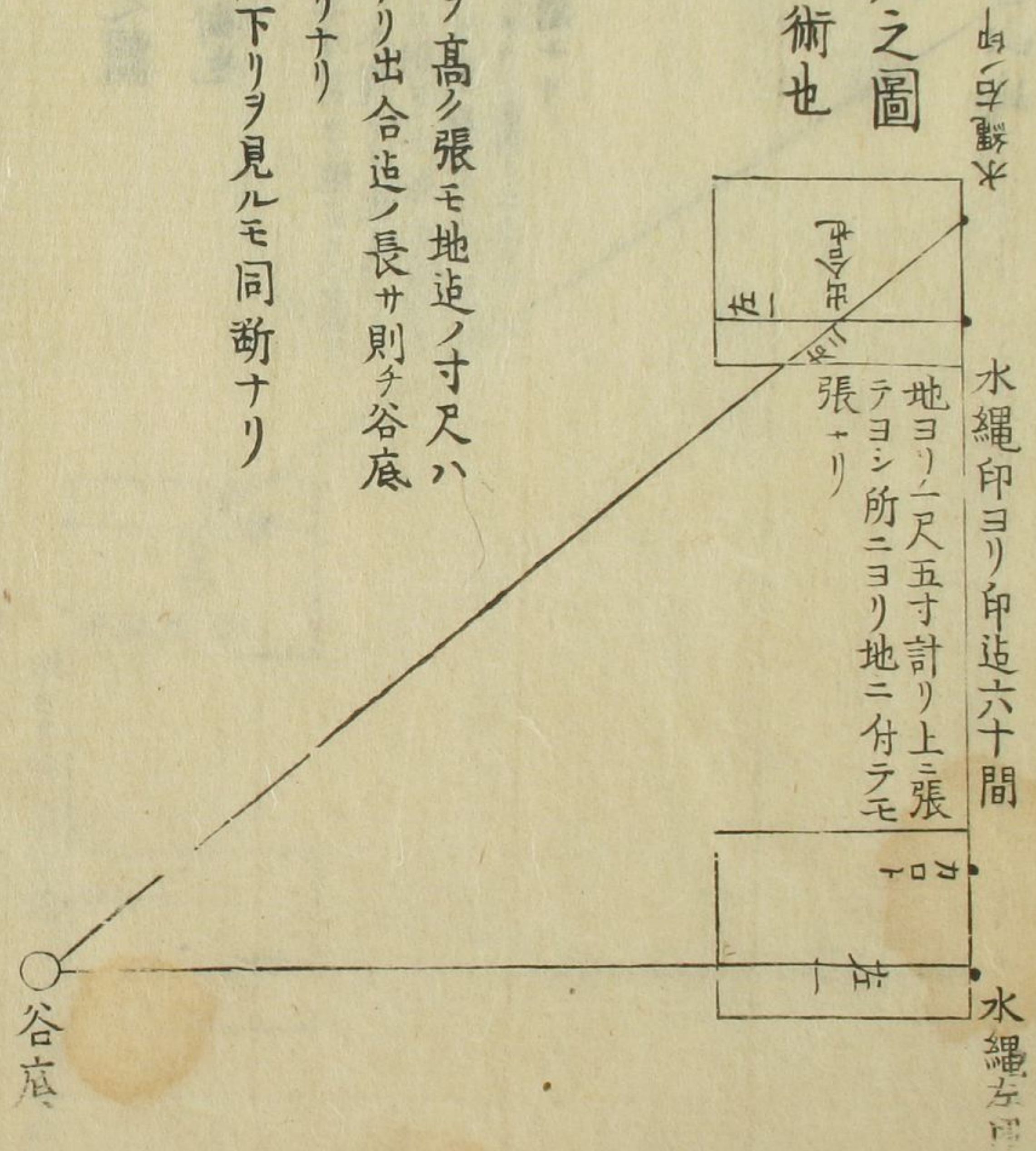
水繩一尺五寸計ヲ地ヨリ高ク
張ニヨツテ水繩ヨリ地迄ノ見
通弦ノ如クニ何尺ト知テ此寸ヲ
出合ヘ加ヘテ則地ヨリ峠迄ノ
遠サトシルナリ急ナル上リヲ
見ルモ同勘ナリ

○山峠



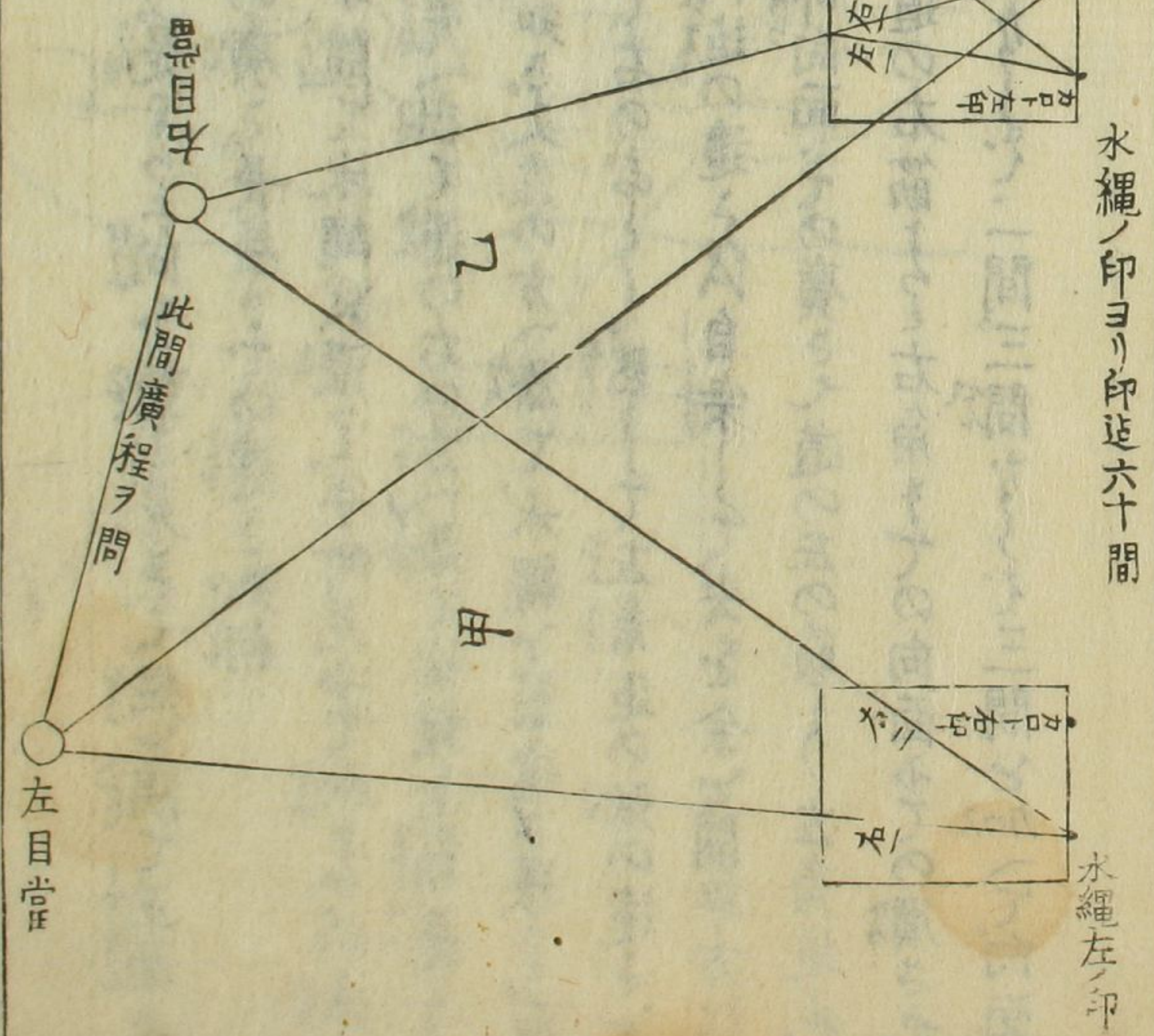
下町見之圖 淺深術也

水繩ヲ高ク張モ地迫ノ寸尺ハ
不入ナリ出合迄ノ長サ則チ谷底
へノ遠サナリ
急ナル下リヲ見ルモ同断ナリ



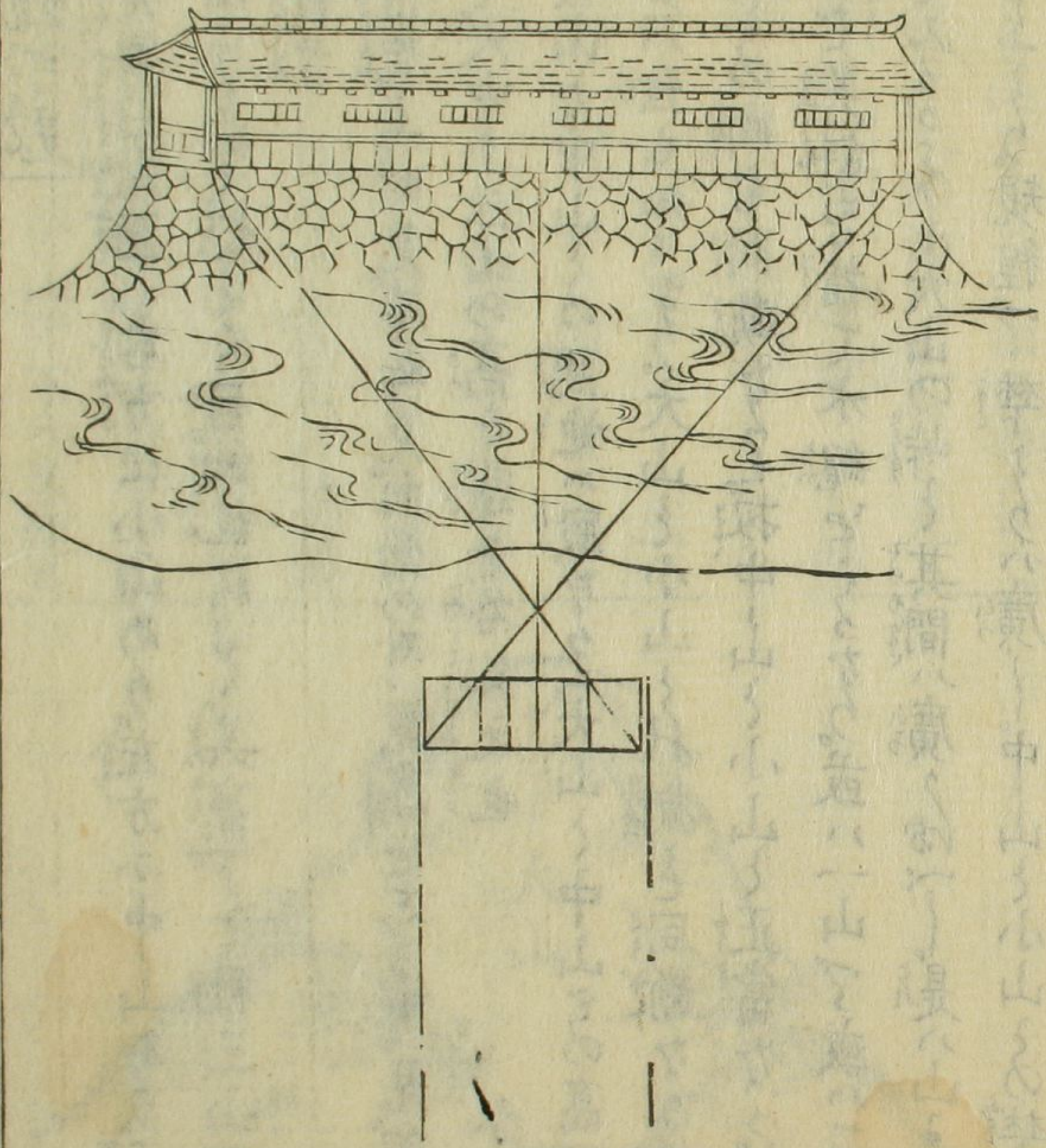
向町見之圖 廣狹術也

甲ノ通り向ニテ
間ヲシルナリ



廣遠二術町見

或人問曰細道はり是らうを向を望と見と。堀と隔て正面小
 長屋あり其長屋の廣さ長屋までの遠さ如何
 術曰先狭と間尺を隨て水繩を張る。平町見めて向までの遠
 さと知つ。扱細道の先へ出て道の右の方へ添て水繩を筋違り
 張る。左迫の遠さ知る。又左の方へ添て水繩と筋違り張る。右
 角迫遠さ知る。右のどく。然して左角迫の弦の遠さと
 自乗して其内の向迫の遠さ自乗して去を余と開平方に
 開る。倍之して此数即向面さの廣さ。道の左の筋より左角迫也
 右方も同術あり。道の右筋より右角までの向面さの廣さ也。
 是に細道の幅二間。三間。四間。五間。六間。七間。八間。九間。十間。
 の廣さなり。



量地指南後篇卷四

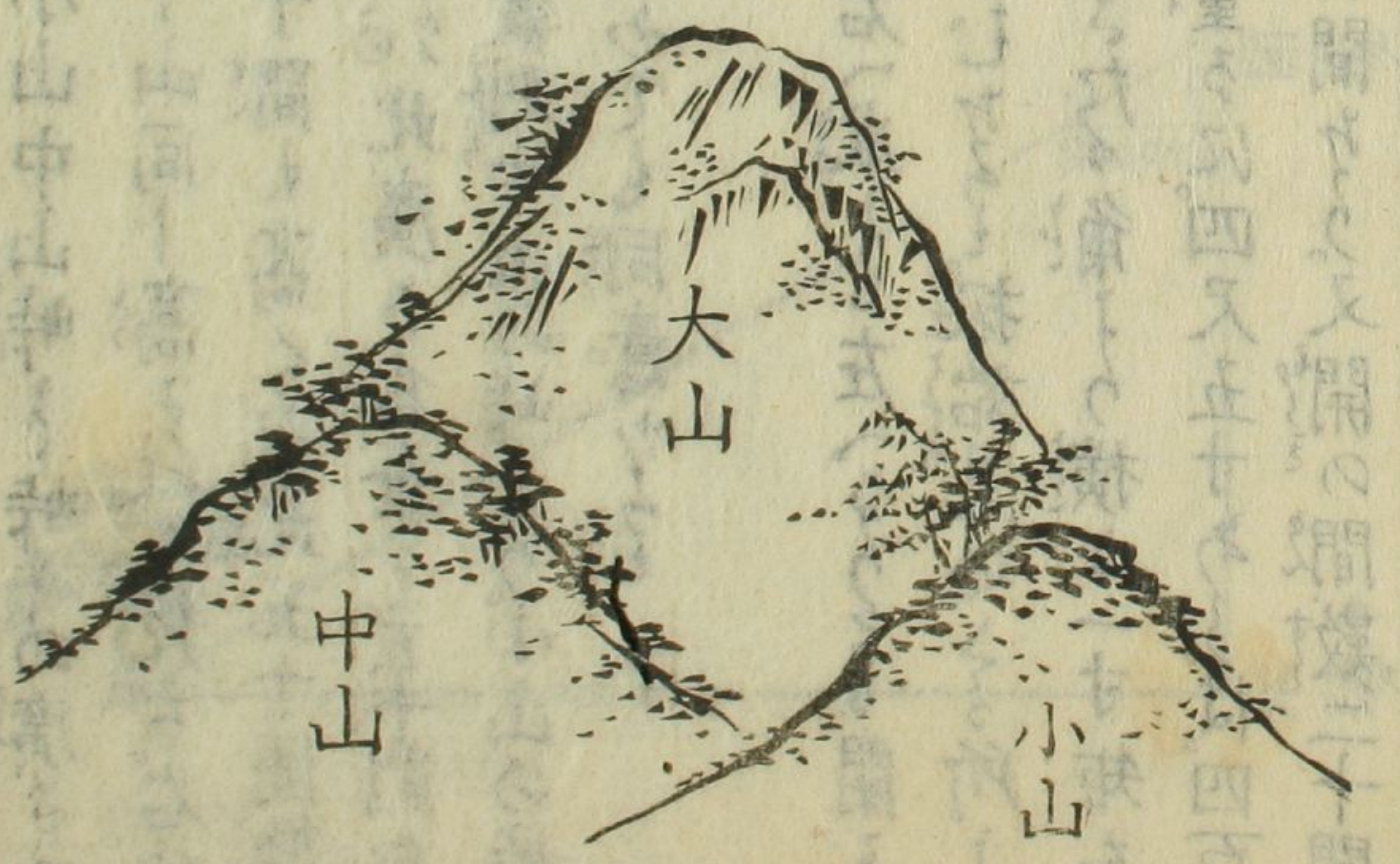
乱面町見

或人問曰向面むかひ小右方こみぎに小山あり。左方ひだり小中山あり。正中せいちゆうに大山おほやまあり。かくれごとく目的めてき乱らんにご其高下そのたうげと彼三山間かのさんさんまの經けい地幾ちいげ于や

術曰先上しんじやう町見。平町見。向面の町見。高たかとさる町見。四色ししきを以て。大中小三山の高たかと遠とほと各知おのづか之也。

扱大山と中山との間地ハ股またなり。大山と中山との高下ハ勾まが也。然しかもバ弦しづも知るなり。大山と小山と此術このじゆつと同斷どうだんなり。中山と小山との術じゆつも同斷どうだんなり。扱中山と小山と正當せいとうなるは斜曲しゃきよくあり。む其斜そのしやを指さて水繩みづなひとさるなり。或ハ一山ひとやまづ或ハ二山ふたやまづ分わかてみるがごとく。大山の峠たかと其間ハ廣ひろくはべし。是ハ山やまハ登斜のぼりしやあり。ふより。規程きじやうづ。禁かぎよりハ廣ひろく。中山と小山との禁かぎの間ハ

狭せまきものなり。小山の禁かぎにて山の西方せいほうと。向面町見あり。見る時ハ禁かぎハ指渡さしわたの徑けい知るなり。禁かぎの幅あはら廣ひろくも。禁かぎの真中まんなかと禁かぎの外端そとへと此間このまを知しべし。なり。別の山やまと同斷どうだん。然しかもハ山々の下徑したけいと知して。半はんして勾まがう。股またふ用もちて。其山の高たかハ弦しづハ勾まがう。股またふ用もちて。弦しづハ知るなり。弦しづとハ山やまの登斜のぼりしや規きのこもつ。小山中山禁かぎあての廣ひろハ弦しづ。甲かと名付なづく。中山の下の半徑したはんけいと。小山の下の半徑したはんけいと。

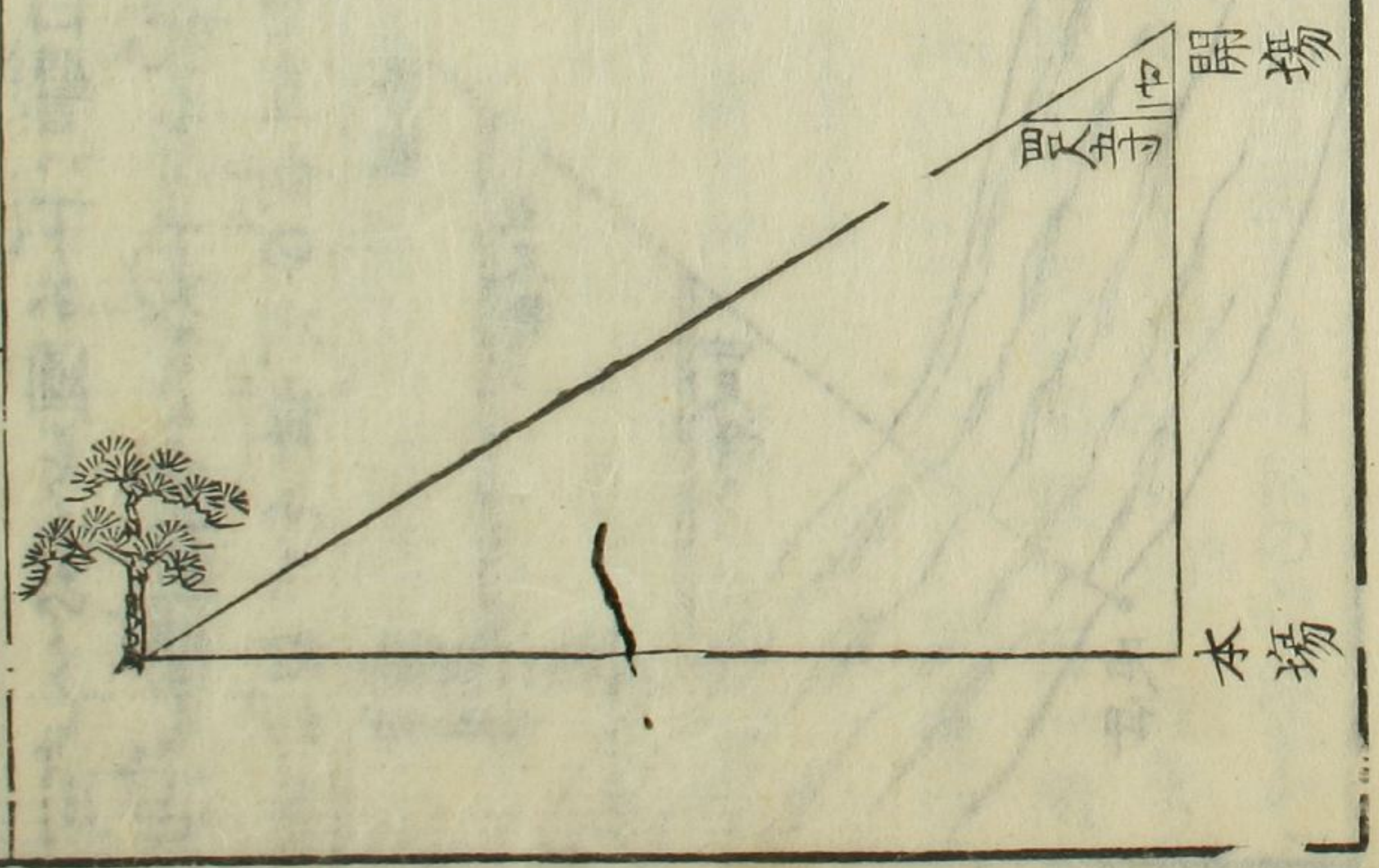


和して是へ甲と加へるの數ハ小山中山峠と峠との廣也
 別の山も同斷然ととも小山中山同ト高されとれと右の
 ごとく中山假令バ小山より五十間も高くとも此五十間際
 迄の廣さく知るむ。但上よりの廣さより此廣さ自乗と五十間自
 乗と和して開平方方開て此數則中山の峠より小山の峠
 迄の弦にその廣さあり別の山あても同意なるも

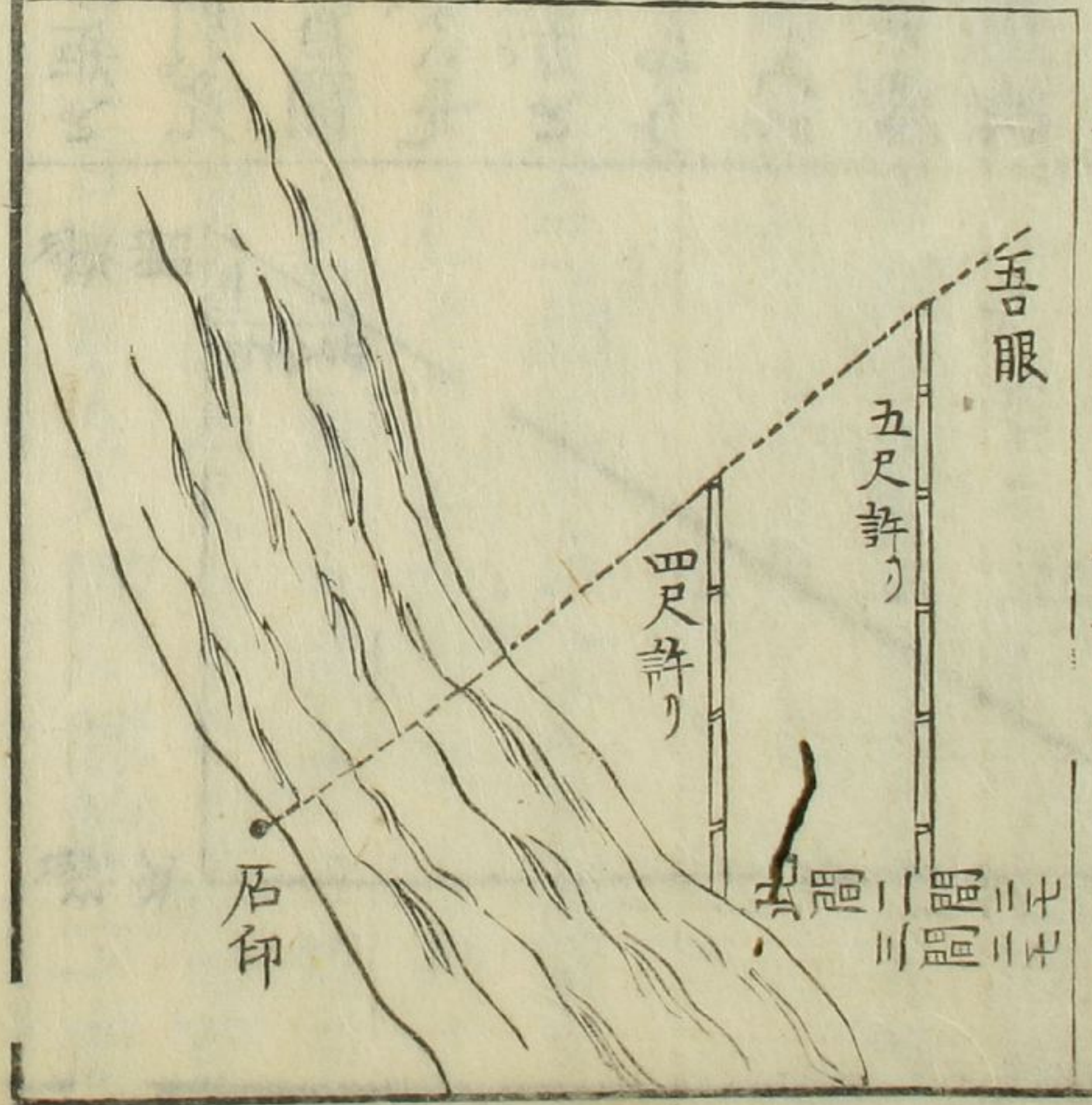
知遠近

術曰先正面の目的を見込右へ成とも左へなりとも開さ
 て又其所よりと目的と見こむむるも扱始見込る所よ
 り十間際へ開きたる角より横は一寸矩を
 差出し其矩より豎の筋を量るに四尺五寸ありば四百
 五十間なり五尺ありば五百間なり又開の間數二十間

なりば二寸の所より横は矩を
 出し其端より豎筋を引此
 條を量るふ九尺ありば九百間
 又一丈ありば千間なり余ハ是
 とつて考べし何時も彼方と
 此方へ引さつて見る心あり
 横は開くこと成るれともハ
 豎に進退して見るべし其理規
 矩術と違ふこと遠近廣狭
 高低淺深をけりて是又
 同然なり故よ是を贅せしむ



又遠近是移とつふこと有り。術曰譬如下小圖もるおとく。川幅を見るふ。川の前小四尺許の杖を立。夫より二三間も退き。吾目より少し下めも。又杖を立。向の川岸めも心印を志て。二杖の杖と心印と三所小見て極。若見通不揃む。手前の杖杖十尺進退して三所脱合。処立。杖と杖との間。三間有り。先の杖を左へあり。右へなりとも。其身ハ動るべし。杖をより立。又杖と杖との間。三間



あして。試合所の川原小印と付。先の杖より川向の心印まで間數程。川の廣と知る。杖を立替見る。こゝハ。四規を廻す理あり。但川端より一間やど。前小。先の杖を立。まは間數と内一間引。幾り。川の廣と。巻ふ。杖の抄。脱合。見へ。兼ぐ。末に横竹と結び付。其竹の上より見通して。又術曰。杖を中脱。鉄炮打の手前のど。く。持て。其杖の抄を向の川端へ見通し。杖の抄上げ下げして。向の。杖の目付所を脱合す。尤杖を持。る手前。動るぬ。やうに。我身と。四規。して。服へ。開る。此方の川原へ見移し。其杖の抄の目的。ま。く。間數。や。ど。川乃廣。さ。し。知る。又術曰。川堀等を隔て。其場小。臨。紙を疊て。勾股弦の形と制し。是を以て。杖よ持。添。杖。よ。合。す。則弦を正面の水の上

岸へ見通し。其杖と紙とを少しも離さず。左へかり
こゝと後へかりこゝも見移し。其弦の尽る所まで。陸地より
歩數をゆつて間尺を極め。假令む百五寸跬あり。三跬
を一間の積りて五十間なり。是即向正面求る所までの
遠程なり。

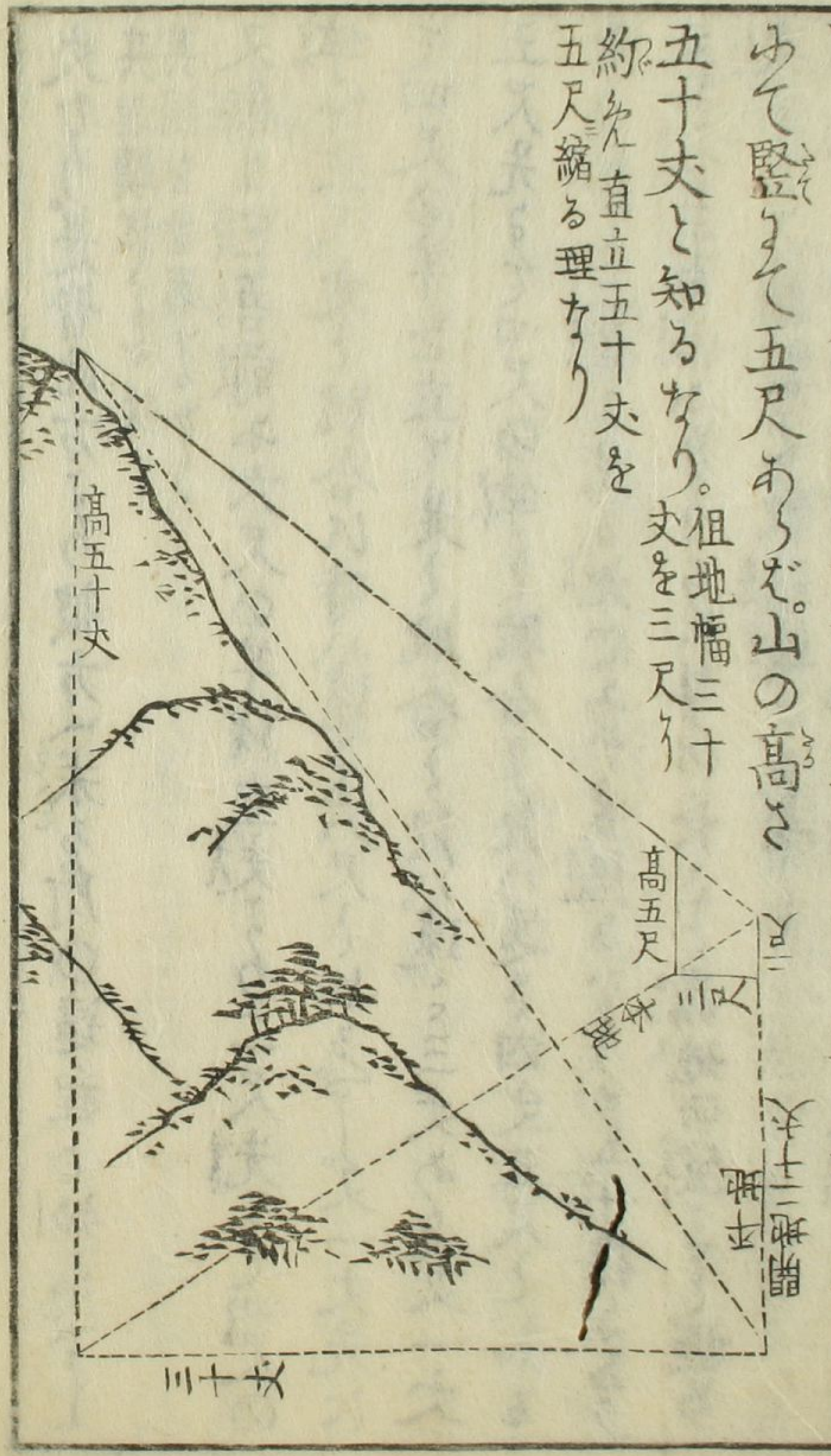
又遠程を量るに。此方より彼方を見るとき。假令ハ吾前
に六尺の棹を立。丈より又一丈進んで五尺九寸の棹を立
向の目的と。二本の棹と三所一致ハ脱合するなり。然して
一分を一尺の割ゆ。前の棹六尺。先の五尺九寸を算し
て遠さ六十丈と知るなり。或ハ先の棹二寸短くして脱
合ふれば。遠さ三十丈あり。或ハ三寸短くして脱合ハ
時ハ。遠さ二十丈あり。又三寸短くして脱合ハ時ハ。遠さ二

丈なり。是皆此方より彼方へ求る所の遠程と知るべし。
其理顯然なるが故なり。
其図を省畧するなり。

又術ハ曰。吾前ハ六尺の竿立。丈より二尺先より四尺の
竿を立て。是と脱合ハ時ハ。遠さ六尺と知るべし。又一丈先に
て四尺の竿を立て。是と脱合ハ時ハ。遠さ三丈あり。又一丈
五尺先より四尺の竿と脱合ハ時ハ。遠さ四丈五尺と知る
なり。凡て三倍ハ見る。此心めて五倍ハなり。凡て倍ハあり
るも。乃至百倍ハなり。凡て竿の長さと。畧地の宜さと。極め
次第に。間數丈數遠近あるを。

或問山の遠程と直立と。二品を一同に量ること如何
術曰。本場ハ於て。彼方の山を此方より曲尺ハ合セ。三角に
見通し。三角ハ見通す。則術次ハ述より。其見通する形の動るやうに假

令ハ右の方横へ真矩に二十丈開きて見通し。又始の如く其所にて二尺の曲尺を出し。是も矩の手小合せ見るふ下まゝく三尺あつて地幅の遠さ。二十丈と知る。又其所めて豎きて五尺あつて山の高さ。但地幅三十丈を三尺より約先直立五十丈を五尺縮る理なり。

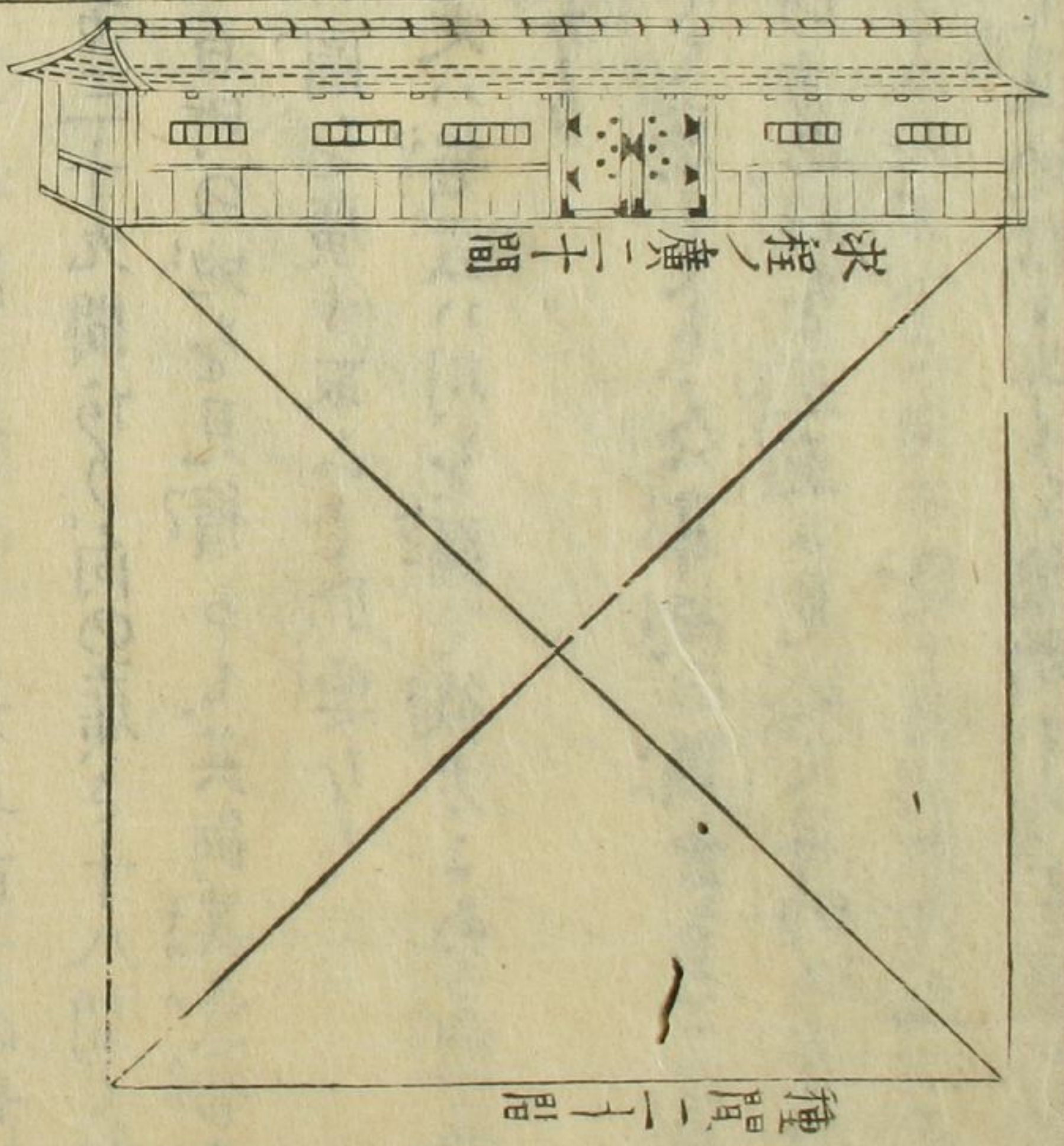


知廣狹並遠近

廣狹を知るふ扇矩といふなり。扇矩といふハ扇骨乃おとれた圖を作り。是小合せて向面の廣狹と量る術也。尤彼方の正斜小隨て用る。見盤術も同。昌弘云。ゆのてこに織密微細を能分別なる志むること。數家の常はて規矩術者の企及ふ所ふあつて察すべし。其法ふ曰。○の方遠さ五十間あり△の方五十四間ある時圖面にて○の方五寸四分量り轉て其両方相去ること二寸あつて向の廣さ二十間と知る。又△の方五十四間△の方六十三間半ある時。圖面めて△の方五寸四分△の方六寸三分半量り轉て其両方手前と相去ること一寸九分あつて向の廣さ十九間と知る。又□の方両方ともに遠さ五十二間半づ

の廣ひろとも二十間なり圖づを見て詳つたふとべし

私わたくしよ云い筭さん勘かん術じゆつふ廣くわ
狹さやを量くらる法ほう如何いかなりと
書か記きたまはとも畢ひつ
竟いさ同どう理り同どう術じゆつなりは
とゆへ煩わづらりたるを
省へいて載のせ



知ち山やま高たか程ほど

山やま岳たけ高たか程ほどと量くらる時とき先まづ本ほん場ば小せう臨りんとて吾われ前まへふ一いち丈じゆの長なが竿さんと
建た又また其そのより四よ尺せき退ひきとて四よ天てんの短みぢ竿さんと立たて前まへ後ご長なが短みぢ二に本ほん
の竿さんと山やまの頂いただきと耽た合あふ時とき又また其その長なが竿さんより十五じゆご丈じゆ退ひきと前まへ術じゆつ
のてし。一いち丈じゆの長なが竿さんと建た又また其そのより八はち尺せき退ひきとて四よ尺せき乃すなは短みぢ竿さん
と立たて前まへ後ご長なが短みぢ二に本ほんの竿さんと山やまの頂いただきと耽た合あふとた。是こゝ直ただ立た
の高たか程ほどあり。扱さ其その詳つたなるを知らず。長なが竿さん一いち丈じゆの内うちは短みぢ
竿さん四よ尺せきを引ひき去さり六む尺せきとなり。扱さ又また始はじめの退ひきと後のちの退ひきと五ご尺せき
と八はち尺せきの退ひきとゆへ下したより四よ尺せき上うみへ高たかさ見み通とおす心こゝろ之これ故ゆゑ小せう
十五じゆご丈じゆ小せう六む尺せきを乗のりて九く十じゆ丈じゆとなる。その竹たけを初はじめ後のちの退ひき
五ご尺せきと八はち尺せきの差さ三さん尺せきとて除のけり。竿さんより上うの高たかさ三さん十じゆ丈じゆと
かる。是こゝに竿さん一いち丈じゆ加くわへ都つ合あ三さん十じゆ一じゆ丈じゆ。山やまの高たかさと知しるなり

丈丙と以前前の短標と後標との間五百丈なり。是を以て高と
 六百七十八丈遠と一萬五千丈と知るなり
 又山岳の直立と知る
 術を問

答曰山上より平地迄
 斜の間敷を別術を
 以て兼て量と知る。然
 ちて後直立を知る也
 平陸より山頂までの
 斜登の間敷を量と
 知る術ふ前件を詳
 かに



術曰遂め別術を以て量と知る山下より山頂まで斜の
 間敷たとむ二百五十間あるとんハ山頂に至ると本場と定
 め。それより二間半の竿或圖のさく斜は差出し。其竿此下
 端。又別ふ直立は竿と立させ。此竿二間なりハ直立二百間。此
 竿二間半なり。直立百五十間と知るべし

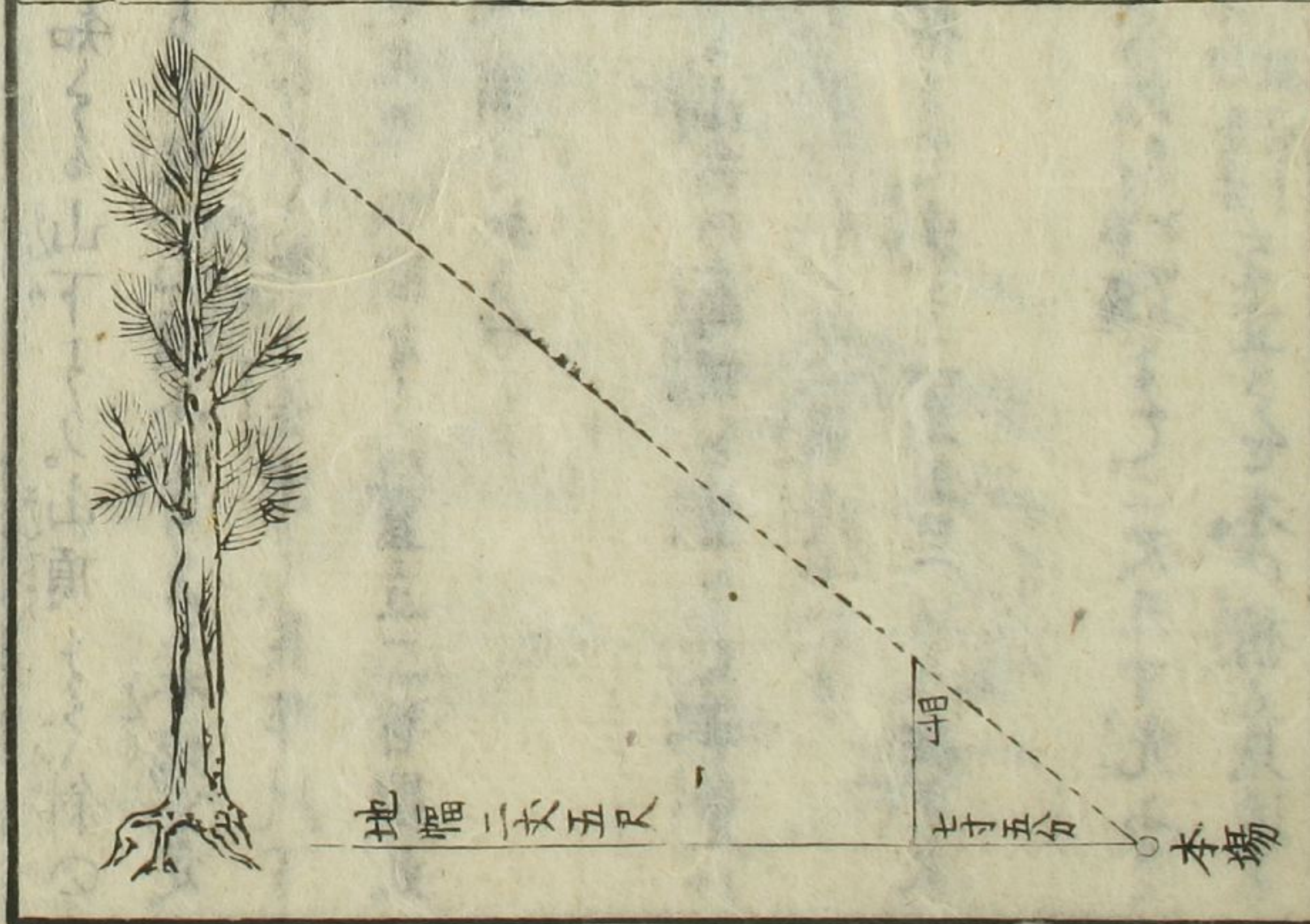
知物高

知物高といひ知木高といひも。山岳の高程を量るも。畢竟ハ
 一術をねども。算家其術名を別たし。爰に其終ふ記す

或問曰今此所より向方木の根まで遠と二丈五尺なり。彼立木
 の高さは知るの術如何

答曰術曰地幅二丈五尺ありハ此所と本場と二尺五寸先めて
 五六尺の竿竿長く見通の所小印を付を立させ。木の梢と見通と

三所一平小見渡す。此竿即
 木の高さとなり。但二尺五寸の
 所より竿五尺あり。木の高
 五丈と知る。又二尺五寸の所
 にて五尺五寸あり。木の高
 五丈五尺と知る
 又云木の根まで二丈五尺あり
 時其所より一丈の竿を立。又五
 尺退る。竿の端と木の抄と三
 所脱合せ。地より四尺上目と
 あて見通す。積より竿の高を
 六尺より相去る。二丈五尺を

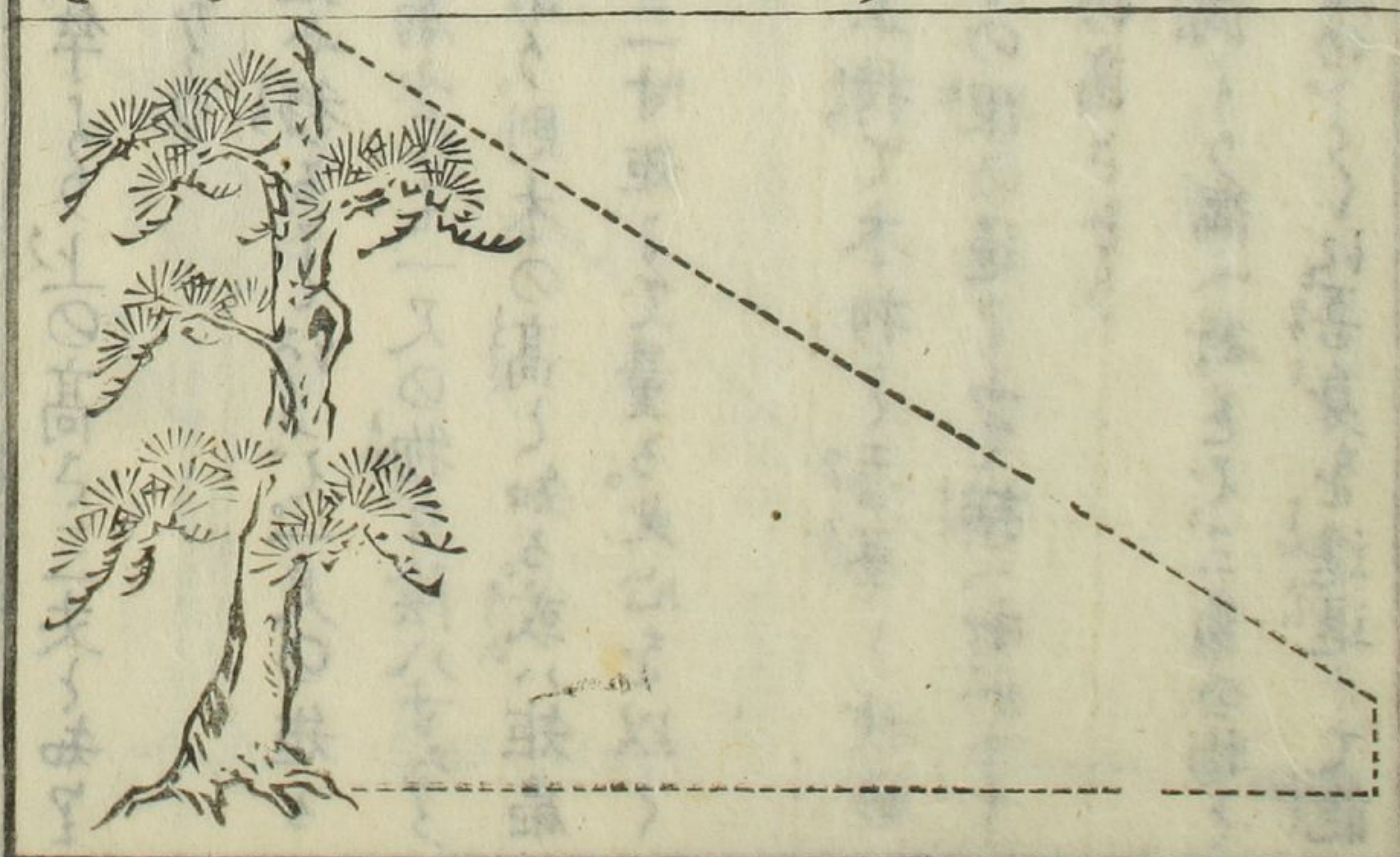


乗して後小退く。五尺を除け。竿より上の高さ三丈と知る
 竿一丈加へ。木の高さ四丈と知るなり
 又別術云。晴天の時。木の日影地へ移る。一尺の矩
 扇。是を以て量る。其矩より扇より一尺の物。日陰八寸あり
 む。八寸の矩より量ると。二丈五尺あり。則木の高と知る。或ハ矩扇
 一尺の物の影一尺二寸あり。一尺二寸矩より量る。此心を以て
 竿より知るなり
 又別術云。吾目通小杖を向上より持て。木抄と吾拳と杖端
 と三所一平小見渡す。杖其杖を木の根の通より横へ打かへ
 杖端より知る所まで間敷なり。木の高さなり
 又別術云。紙を四角より折て。又其隅より隅へ折む。三角の物と
 なる。是を我手より持て。木抄と脱金のより。吾身を進退して能

合所ふ止る。此所より木の根まで
即木の高さより。四方になつて見る
心なり。勿論又是小居長三尺と加
へて木の高と知る

或問曰向正面は堀を隔て櫓より
此方より彼方の櫓の下まで平町
見を以て量るふ。遠さ五町あり。此櫓
の窓までの高さ如何

術云前表と後表と。右の堀の手
前より陸地ふ立て。右の櫓の窓と弦
より見通して。則二表の間の地径の尺
を以て。前表の尺の長を除て得数と



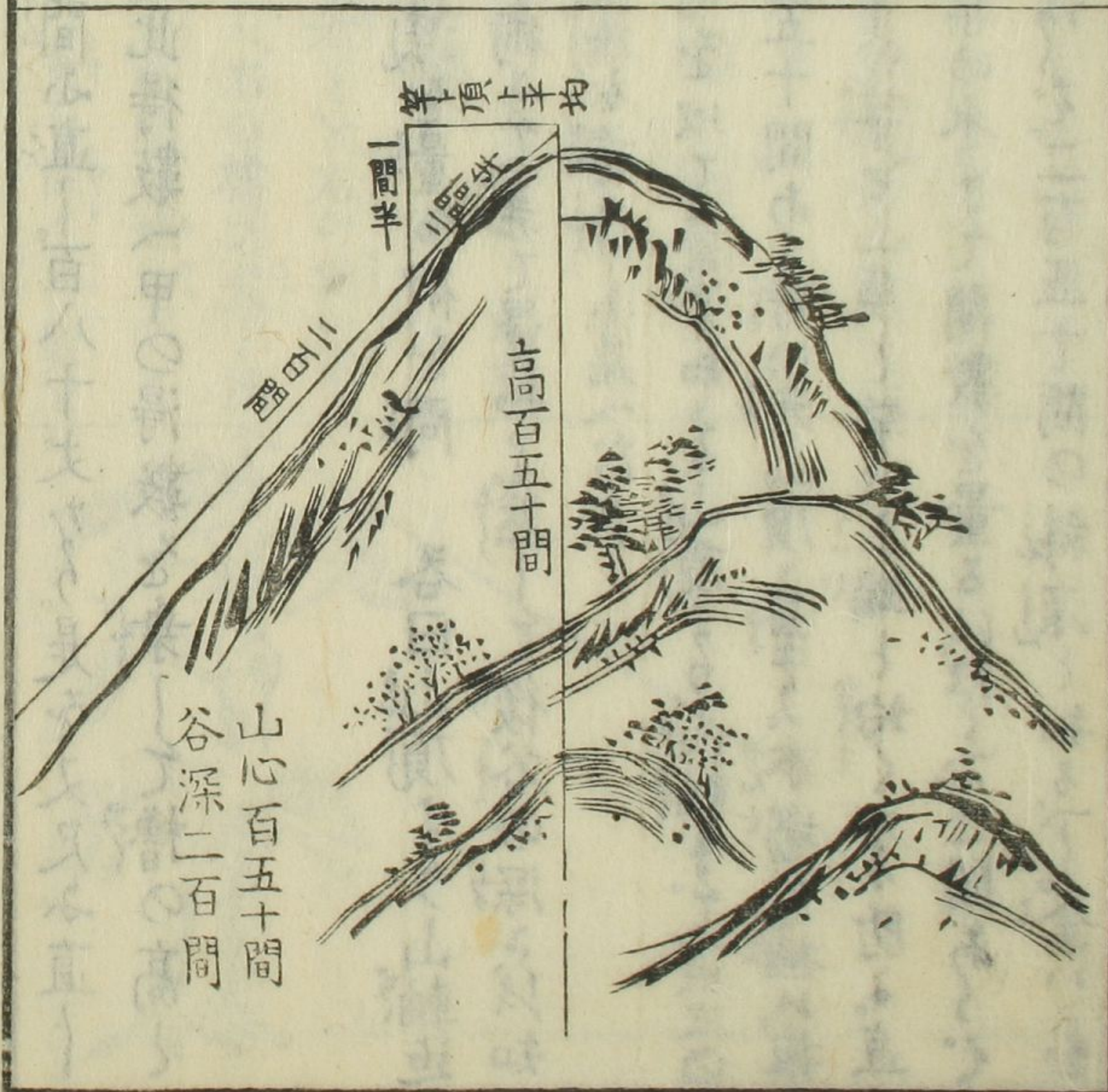
甲と云。五町を間ふ直し。百八十丈なり。是を又尺ふ直し
千八百尺なり。此得数へ甲の得数を乗して櫓の高と
知るなり

知谷深

或人谿谷の斜深を量る術を問。答曰山頂より山軸迄
直立の間数。別術ありて乗て量知る。然して後谷の深は
かり。別術の作法を前章ふ見へたり

術曰兼て別術を以て量る。知る山頂より山軸まで直立の
間数。たとへば百五十間ある時。先山頂に至り。本場を極め。扱
其所より一問半の竿と山頂と竿の上端と均くたる所。直
立に立させ。其竿の木を以て間数を量るに。たとへば二問ありて
二百間。二問半ありて。二百五十間の斜深と知るべし。余はこゝ

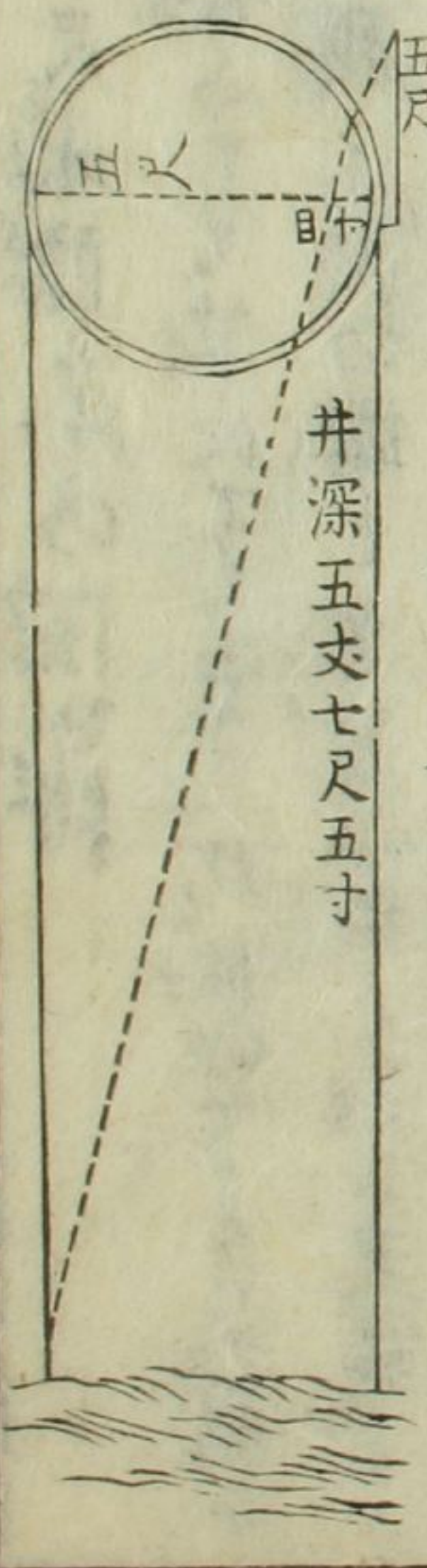
これより働よ
 私云云等勘術
 に谷の深さと知
 法如何程も書
 記したとも畢
 竟同理同術な
 るを以て煩
 りハ省て載す
 覧者術のす
 ぢれを訝くふ
 むとかなるも
 り



量井深

或問曰茲は水井あり。口径五尺。深底とさげ。今其水面迄の深底幾干。答曰深と五丈七尺五寸なり。

術曰新小井幹を添て棹めても杖めても正直に立て。其末より又假よ六七尺の弦ふならざるを差出。此頭を杖の頭と水面の向と弦ふ見通し。其立たる股の本五尺の本まで。弦四寸開く此四寸の勾口を以て井の徑惣勾の五尺と量せば。十二半なり。十二半ハ六丈二尺五寸なり。此内假小立たる五尺の棹を引む。機五丈七尺五寸なり。棹杖ハ四也。股也井徑ハ三也。勾也假物ハ五也。弦也。



又問曰水井徑四尺。水際までの深と問

術曰井戸がハよ杖あても竿にても立て。此板の下より。假ふ
勾弦出し。此勾の頭と杖の頭と水崖の向と弦よ見通し
則杖の長さ弦以て。勾の長さ弦除きて勾配なり。是をりつて
井の徑を除きて深さ弦知るなり

知水深

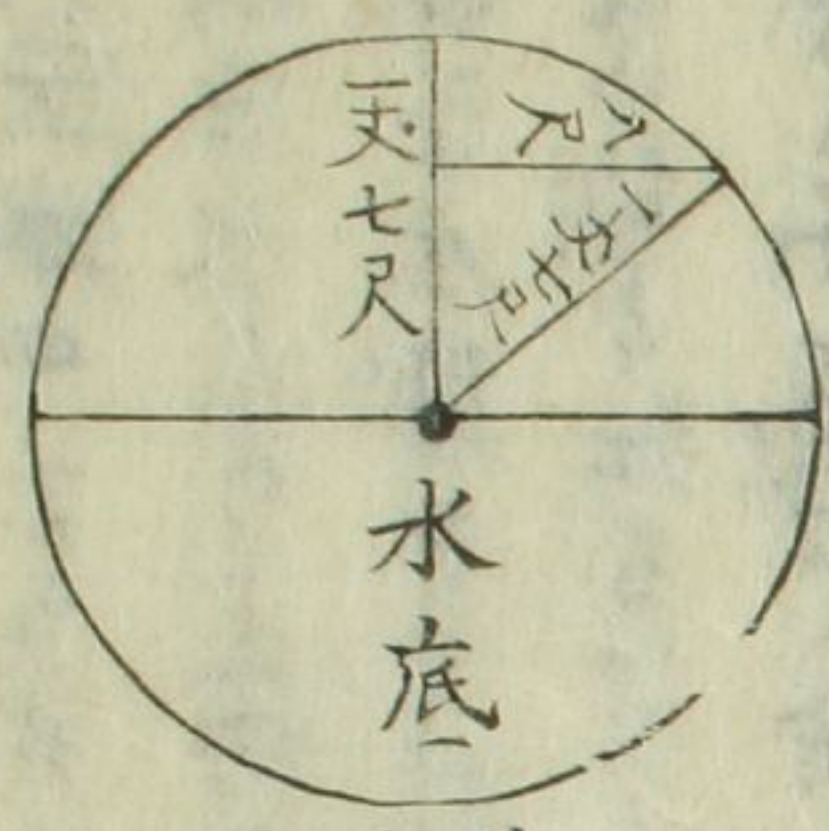
或問曰池中葭二本。根を連糸並じて生なり。水底の深
さハ知をくむ。水面よ出くる所二尺あり。水底までの深
さ幾干

答曰水面より池底まで一丈五尺葭の長さ一丈七尺
術曰葭二本の内一本の稍を斜に引撓りて水面と除る
とハ初直立の所を除く。隔ること八尺あり。扱圖の如く。二尺

と八尺とと。二寸と八寸小縮めて圖し。是を渾莖をそのて
規圓りて量るとハ其水面より池底まで一丈五尺也
葭の長さ一丈七尺と速ふ知るなり。是ハ機轉の術ともふ
る。算勘術も其法を述るなり

水深一丈五尺
葭長一丈七尺

葭二莖



此圖ヲ按シテ
知ルヘシ



又云水中より芦生じ出る其水底の深さと問
 術云水より上の芦の長さ六尺勾弦の差と比。則出所の芦の
 頭を水際まで引撓り。此寸を股と比。土より水際迄芦の
 長い勾と知るなり。則差と自りて子より股を自りて其内
 けく子と去て余を實と比。差を陪して實を除て水底の
 深さと知るなり。

折竹術

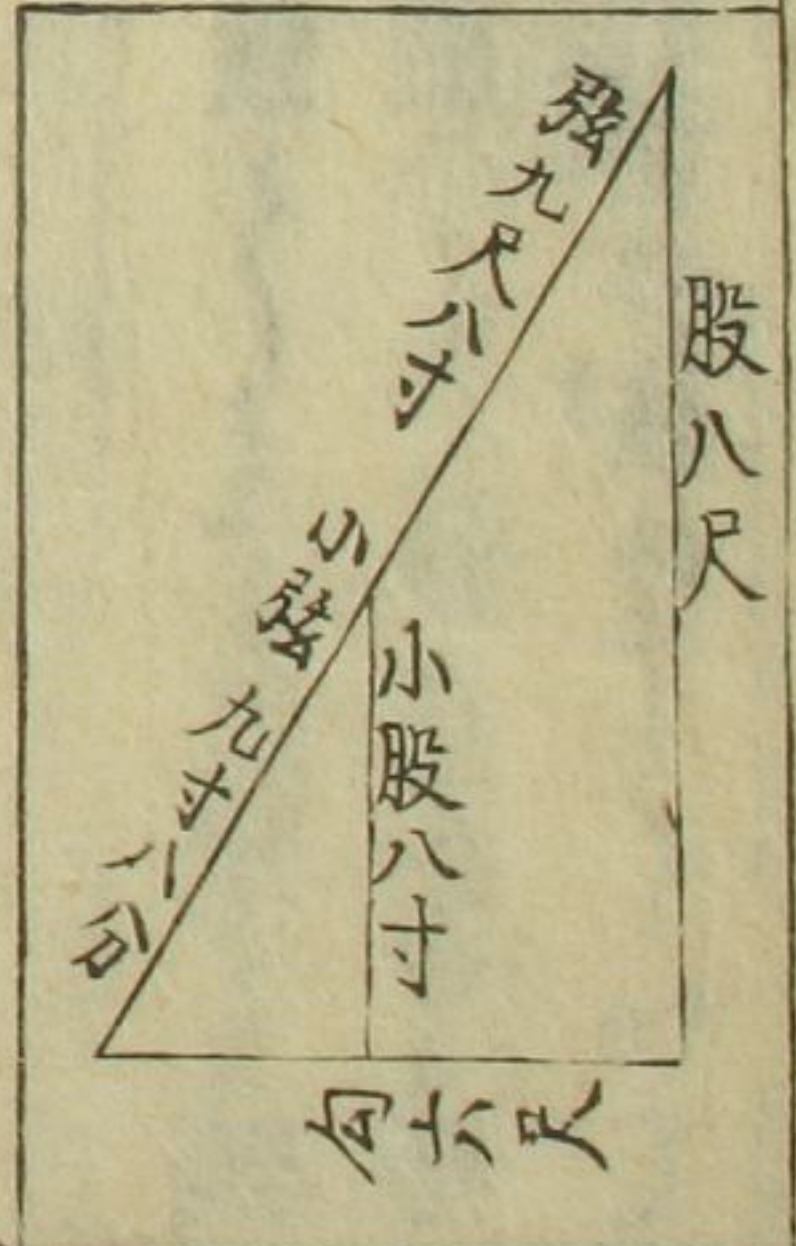
或問云爰小雪折竹あり。梢の地より落るること。竹の根より
 上二尺の所まで。圖の如く八尺股へ除り。長さ八尺程上よ
 り折を。全竹の長さ八尺程と問
 答曰根より折目まで一丈七尺也。折目より梢も一丈七尺也
 術ハ池中葭の法と同也

又問右小所謂竹の折目半なる積
 なり。折目若梢の方短き時ハ如何
 答曰折目梢短き時ハ竹の根へ引
 付る心持を。假令ハ根より一尺
 上ふあつて。一尺上より前術の如く
 して後小一尺加へ知るなり
 又問折目梢の方長き時ハ如何
 答曰折目梢の方長き時ハ下小圖
 するごとく。折目より下の豎を股とし



四と比。折目より梢の地より下る所を弦と比。五と比。根より梢
 のあたる所の間地を釣と比。三と比。圖の如く。鈎六尺ある時
 ハ其隅の六寸の所まで。矩よ合せ。刺盤の法の如く切て

とくしむると。小股八寸と。弦九寸
八分あり。是を十双倍して。股八
尺弦九尺八寸。鈎六尺と知るなり
糸女ハ圖を考ふる



量流物

或人問云爰小長流水あり。水上小泛ふ木葉あつて流る。一眨小
道程何程流るといふ。答曰二千三百七十五間
術小曰流る木の葉呼吸一息は二間づつ流る積めて呼吸昼
夜一萬三千五百息といふ。是小三間を乗ずれば。四万令五百間
とある。是と十二眨を除くれば。一時三千三百七十五間とある

量行程

今旅行の人あり。大畧一日の行程何程と問

答曰一呼吸の間は三間づつ歩むれば。九里十三町半
なり

術曰呼吸一日一夜ふ一萬三千五百息と云。是を昼夜よ折
半して。一日六眨の呼吸六千七百五十息あり。是は三間を乗
二万零二百五十間とある。是と一町六十間を以て除けば。三百三十
七町半とある。是を一里の町三十六町と以て除て九里十三町半
と知ふなり

量而高下

今左右兩所小火見櫓あり。其高下と量る術如何と云
術曰手前の敷居上より向の敷居上と先上と。先下り
と疾と先見極るなり。榑定木の上と塞ぎ。定木と横
て。榑の内より見て。先上と。先下りは高しと知ふ也。上

町見もく則向の高と低知る。平町見よて向の遠さとある
 ぐれをり。先下りまうと。下町見よて見通の弦を知て甲
 と向の敷居より上に目付として。平町見よて遠さと知
 て。股をりよと低。甲乙をとりて鉤ハ知るなり。此鉤少く
 則手前より向ハ低とらふと線知るなり。

量地指南後篇卷之四終

